

病気早見表

病気早見表

ページ	病名	潜伏期間	予防接種	感染	かかりやすい年齢	かかりやすい季節
3	インフルエンザ	1～5日	任意	あり	—	春先
4	突発性発疹	—	—	あり	乳児	通年
5	プール熱 (咽頭結膜熱)	5～7日	—	あり	幼児期～学童期	初夏～秋
6	おたふくかぜ (流行性耳下腺炎)	14～24日	任意	あり	2歳～学童期	晩秋～春先
7	はしか(麻疹)	10日前後	定期	あり	乳幼児期～学童期	秋～春先
8	三日はしか(風疹)	2週間前後	定期	あり	乳幼児期～学童期	春先～初夏
9	水ぼうそう	14日前後	任意	あり	幼児期	冬～春
10	溶連菌感染症	2～5日	—	あり	乳幼児期～学童期	秋～春
11	手足口病	3～7日	—	あり	乳幼児期～学童期	春～初秋
12	ウイルス性胃腸炎	1～3日	—	あり	乳幼児期～学童期	晩秋～冬
13	中耳炎	—	—	なし	—	—

※表に記載された内容は、あくまでも目安です。

エルエルは、
long lifeの略です

エルエル
LL

<http://www.kyorei.com>

VOL.40 No.3
通巻158号

子どもの 病気



日常の異常に気付くことが治療の第一歩

子どもが病気になったときの第一の主治医は母親です。日常の状態の異常に気付き、早めに対応することが治療の第一歩です。そのためには病気についての正しい知識をもつことが必要です。

本書は、子どものかかりやすい病気について、わかりやすく解説しておりますので、たいへん参考になると思われます。座右においていただければ幸いです。

監修 日本小児科学会名誉会員・日本アレルギー学会名誉会員

同愛記念病院元副院長 馬場実 先生

CONTENTS

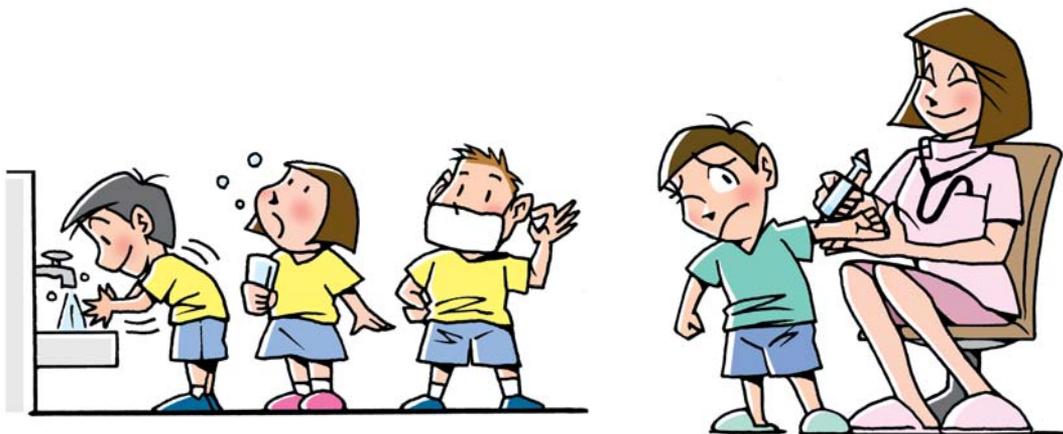


インフルエンザ	3
突発性発疹	4
プール熱(咽頭結膜熱)	5
おたふくかぜ(流行性耳下腺炎)	6
はしか(麻疹)	7
三日はしか(風疹)	8
水ぼうそう	9
溶連菌感染症	10
手足口病	11
ウイルス性胃腸炎	12
中耳炎	13
Q&A	14
病気早見表	16

インフルエンザ

例年、空気の乾燥した11～4月に流行する、インフルエンザウイルスによる感染症です。おもにくしゃみ、咳からうつります。**38度を超える発熱とぐったりとしてつらそうな症状が出て、頭痛、関節痛、筋肉痛などが特徴です。加えて、鼻汁、咽頭痛、咳などの上気道炎症状が見られることもあります。**

潜伏期間は1～5日（平均3日間）とされ、症状は約1週間で軽快することがほとんどですが、乳幼児の場合は、こじらせると肺炎、脳炎、気管支炎、中耳炎などを併発する場合もあり、注意が必要です。脱水症状を防ぐため、水分補給をまめに心がけてください。急な発熱が起きた場合には、医療機関を受診しましょう。



ワンポイント

インフルエンザには予防接種を受けることも有効です。予防接種で感染や発症を100パーセント防ぐことはできませんが、重症化や合併症の発生を予防する効果があります。小児のインフルエンザに伴う発熱に対して使用できる薬は限られていますので、自己判断でのご使用は控えましょう。

突発性発疹

6～12カ月の乳児期に多く、急に38～39度の熱が出て3、4日続きます。ウイルスによる感染症ですが、感染力は弱く流行もしません。2回以上かかることもあります。急な発熱から始まるのが特徴で、生まれて初めての発熱をこの病気で経験する赤ちゃんも多いようです。

鼻水や咳などの風邪のような症状はほとんどなく、熱が高いわりには機嫌はそれほど悪くありません。多くは食欲もありますが、赤ちゃんによってはミルクの飲みが悪くなったり、下痢を伴う場合もあります。高いまま2、3日続いた熱が下がると発疹が出ます。熱のある間は発疹は出ず、下がるのを待っていたかのように出るのです。

発疹は赤くて細かく、胴体を中心にすることが多く、全身に出ることもあります。2、3日で徐々に消えていき、あとも残ることはありません。かゆみなどを伴うことはありません。

突発性発疹と診断されたら安静を心がけ、水分、栄養を補給してください。



ワンポイント

この病気については特別な治療は必要ありません。下痢をすることもあります。特に治療をしなくても治っていきます。

プール熱 (咽頭結膜熱)

初夏から秋口にかけて多い、夏風邪の一種です。
アデノウイルスが原因で、潜伏期間は5～7日です。
のどの痛みと目の充血、急な高熱という三つの症状が特徴です。
プールで感染し、集団発生することがよくあります。このため、
「プール熱」という俗称がつけました。

熱は3、4日で下がり、のどの痛みや目の充血も1週間ほどで治ります。
赤ちゃんの場合には下痢や嘔吐などの症状のほうが目立ち、目の充血が出ないこともあります。幼児期や学童期に多い病気で、感染力が強いので気を付けましょう。



ワンポイント

目やにや唾液からも感染するので、タオルや洗面器、洗濯物などは別々にしましょう。
また症状がおさまってからも感染力は弱いですがウイルスが3週間ほど便や唾液中に
ひそんでいるので、注意しましょう。

おたふくかぜ (流行性耳下腺炎)

2歳から学童期の子どもがかかりやすく「おたふくかぜ」の俗称のとおり、**耳下腺が腫れて痛みと39度前後の発熱があります。**腫れは、だんだんひどくなり、あごの下まで腫れることがあります。両側の場合と、片側だけの場合があります。潜伏期間は約14～24日ほどです。くしゃみ、咳からうつるため家庭や学校など子どもがたくさん集まる場所で流行します。

髄膜炎、睾丸炎、卵巣炎、難聴などの合併症もあるので、おたふくかぜの症状が出たら、医療機関を受診しましょう。



ワンポイント

口を大きく開けたり、ものを噛むと痛がるので、柔らかいものを食べさせてあげましょう。



はしか (麻疹)

予防接種



はしかウイルスの感染により発症する急性伝染病で、咳、鼻水、くしゃみからうつります。潜伏期間は10日ほどで、幼児期から低学年児にかかりやすく、2、3歳でかかると症状は重くなります。食欲がなくなると同時にくしゃみ、咳などのかぜ症状が現れ、**38度ぐらいの熱がでます。2、3日でほほの内側に小さな白斑ができ、その後熱が再上昇し、顔や胸、手足などに赤斑が広がります。**数日後、熱が下がりはじめ赤斑が黒ずんできます。咳などはそのあとも数日間残っています。

はしかは体力の消耗が激しい病気なので、肺炎などの合併症には注意が必要です。



コプリック斑



写真提供：関東中央病院 皮膚科部長 日野治子先生

ワンポイント

大切なことは保温と安静です。身体は冷やさないように注意し、熱があるうちは頭などを冷やします。

子どもの病気

三日はしか (風疹)

要予防接種



風疹ウイルスの感染により発症する急性伝染病でくしゃみ、咳からうつります。潜伏期間は2週間前後で、**38度前後の発熱と同時に、米粒大の大きさで淡いピンク色の発疹が顔や耳の裏から始まり、1日で全身に広がり、3日でほぼ消えます。**そこからかゆみを感じるようになります。耳のうしろや首のリンパ節が腫れるのが特徴で、触っても痛くありません。

リンパ節腫脹



粟粒大紅斑播種状



写真提供：関東中央病院 皮膚科部長 日野治子先生

ワンポイント

子どもにかかりやすい病気ですが、妊娠初期の女性が感染すると、胎児にも感染し、流産、死産、あるいは出生児奇形の可能性もあるので、十分注意が必要です。

水ぼうそう

水痘のウイルスが原因で感染力が強く、患者の水疱から直接うつります。潜伏期間は14日前後で、2ミリ程度の丘疹が胸、腹部、口の中を中心にあらわれ身体全体に広がり、半日ほどでかゆみの強い水疱となります。3日くらいで乾きはじめ、1週間ほどで大部分がかさぶたとなります。場合によっては高熱を伴うこともあります。



ワンポイント

水疱をかきむしって細菌などの感染を起こさないよう、手をよく洗い、爪を切って清潔にしましょう。発熱があるときは氷などで冷やしてください。すべてかさぶたになると感染力はなくなりますが、水泡があるうちは通園、通学を控えましょう。

溶連菌感染症

くしゃみ、咳からうつり、潜伏期間は2～5日です。

発熱、のどの痛みを中心に、のどの奥が真っ赤に充血し、口内には白や黄色の膿状のものが見えます。

頬や手先、足先に発疹が生じたり「イチゴ状舌」（舌が赤くプツプツと腫れる）が見られることもあります。

その後、指先の皮膚が膜のようにペロペロとむけてきますが、これもしばらくすると治まります。

症状は、比較的早く軽快しますが、菌が生き残り、再発、重症化する場合があるので、医師の指示を守り薬をきちんと飲ませて、完全に治すことが大切です。



イチゴ状舌



体幹のびまん性紅斑 (こどもの身体)

写真提供：関東中央病院 皮膚科部長 日野治子先生

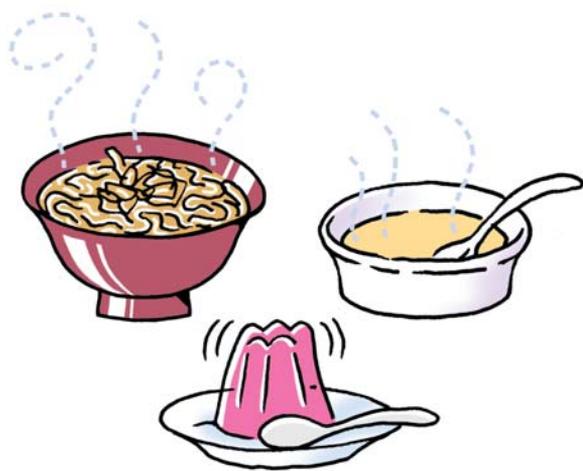
ワンポイント

基本は水分補給とのおどごしの良い食事です。脱水症状を防ぐために、こまめに水分を与えます。食事はのどに刺激を与えない、消化の良いものを用意してあげましょう。

手足口病

ウイルス感染が原因で乳幼児、小児によく見られ、潜伏期間は3～7日です。手のひら、足の裏、ひじ、ひざ、口のなかなどにかゆみや痛み、発熱を伴わない米粒大の水疱ができます。症状は約1週間で治まり、あとも残りません。

ただし、経過中にひどく不機嫌になったり、吐き気などの症状があるときは、早めに医療機関を受診しましょう。



ワンポイント

地域的・突発的に流行する感染力の強い病気です。口のなかに水疱ができているときが一番感染力が強いので、他の子どもに近づけないようにしましょう。口内にできた水疱が破れると痛がる場合があるので、食事はのどごしの良い柔らかいものを食べさせてあげましょう。

ウイルス性 胃腸炎

秋の終わりから冬にかけて流行する、嘔吐、吐き気、下痢、腹痛などを主とする感染症です。おもな症状として、突然吐き始め、続いて水のような下痢（レモン色から白色）が起こります。熱が出ることもありますが、だいたい1週間くらいで良くなります。

吐き気が強い間は、水分を取ることが難しいので、吐き気が落ち着いてきたら、イオン飲料などの水分を、少しずつこまめに与えます（牛乳や乳製品は避けましょう）。最後に多くは下痢の症状が残ります。そのときには、便の様子を見ながら少しずつ消化の良い食べ物を与えていきます。



ワンポイント

ぐったりして、おしっこの量が減ってきたら、脱水症を起こしている可能性があるので、点滴などの治療が必要な場合があります。早めに医療機関を受診しましょう。

中耳炎

中耳炎には急性中耳炎と^{しん}滲出性中耳炎があります。

急性中耳炎

風邪をひくなどして鼻やのどに炎症がおこると、合併症として起こることがあります。風邪が流行する11月ごろから3月にかけて多く見られ、2歳～8歳までの子どもは特に起こしやすいので、風邪のあとは注意しましょう。症状は発熱と耳の激しい痛みで、ひどくなると耳が聞こえにくくなります。

ワンポイント

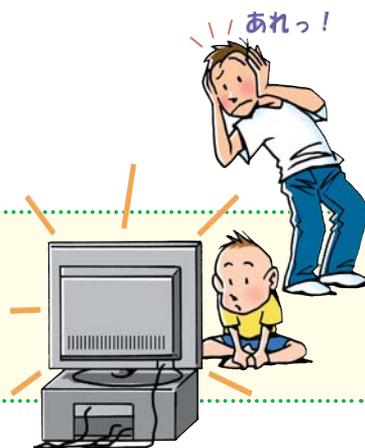
赤ちゃんの場合はなかなか熱が下がらない、食欲がない、一晩中泣き続けるようなときは早めに医療機関を受診しましょう。

滲出性中耳炎

耳の中耳という場所に粘液（膿ではない）がたまる病気で、激しい痛みはありません。低年齢の子どもによくみられます。耳がつまった感じや、聞こえにくいなどの症状を訴えるときは疑いましょう。早期に治療することが大事です。

ワンポイント

気付きにくい症状なので、テレビの音量を大きくして聞いていたり、呼んでも反応が鈍いなど、いつもより聞こえが悪そうに感じたら早めに医療機関を受診しましょう。



Q&A

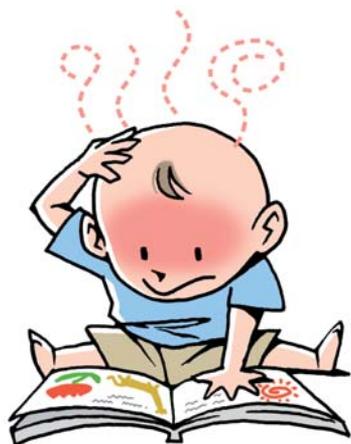
Q1. けいれんを起こす病気とは？

A1. 発熱時に起こるのは熱性けいれんです。生後6カ月ごろ～5歳くらいまでに見られ、風邪などで熱が上がると手足や唇をはじめ全身にけいれんが起こり、ときには意識がなくなったり、唇が紫色になったりすることもあります。治まったあとは、ケロツとしていることもあれば眠ってしまうこともあります。

6歳ごろになると脳の機能の安定とともに、熱性けいれんはほとんど見られなくなります。熱がないのにけいれんを繰り返すようなときは、別の疾患も疑われますので、早めに医療機関を受診しましょう。

Q2. 知恵熱ってなに？

A2. 「知恵熱」という病気はありません。諸説あるようですが、生後6～7カ月ごろに見られる原因不明の発熱に対する俗称で、知恵がつくころに発熱するのでこの名がつけられたようです。母親からもらった免疫がなくなって、よく風邪をひく時期と重なります。しかし、熱が続くようであれば、「知恵熱」と片付けずに医療機関を受診しましょう。



Q3. 予防接種で防げる病気とは？

A3. 予防接種をすることで、ポリオ、結核、ジフテリア、百日ぜき、破傷風、はしか、風疹、日本脳炎、おたふくかぜ、水ぼうそう、インフルエンザ、B型肝炎など、多くのウイルスや細菌から身を守ることが可能です。必要に応じて、しっかりとスケジュールを立てて実施しましょう。

Q4. 家庭内での誤飲事故を防止する方法は？

A4. 家庭内での子どもによる誤飲事故は、いずれも親が目を離した「ほんのちょっとのすき」に起こっています。化学製品等（化粧品、洗剤、医薬品、農薬など）の保管の仕方や使用方法についてチェックし、事故を未然に防ぎましょう。

1. 子どもの目に付かない場所や手の届かない場所に保管する。
2. それぞれ決まった場所に、区別して保管する。
3. 使用したあとは、すぐに片付ける。
4. 化学製品などをほかの容器に移し替えない。
5. ラベルをきちんとつける。
6. 冷蔵庫に食品以外のものは入れない。
7. 有効期限切れや用途不明の不要な医薬品は常に捨てる。



誤飲と思われる場合は、以下の連絡先までお問い合わせください。

（財）日本中毒情報センターへの連絡方法（情報提供料：無料）

大阪中毒 110 番	072-727-2499	（365 日 24 時間対応）
つくば中毒 110 番	029-852-9999	（365 日 9 時～ 21 時対応）
タバコ専用電話	072-726-9922	（365 日 24 時間対応）